
花守の娘とロマンを求める男

天馬 龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花守の娘とロマンを求める男

【コード】

N0022N

【作者名】

天馬 龍星

【あらすじ】

裂鋼迅雷。

信仰学、特にアルネシア神と墮ち神の関係に興味がある。

親に連れられて何度か、聖地・アナスタシアに行つたことがある。

うちの親は共に敬虔な信者で、心の底からイヴを崇拜しているからだ。

夢は教会で働くことなんだ。

その夢を叶えるためにここに進学したというのは、建て前で一人暮らし始めたかったというのが大きい。

両親を説得するためには調度良かつたというのもあるが、ここは去年まで女子校だつたため、女子の比率が高く、しかも美少女が多いと聞いたら、入学するに決まつていて。

男はロマンを求める生き物だからね。ハーレムという響きに淡い期待を抱いてしまつたんだよ。

美少女好きで男性嫌い。潔癖症。

入学式 その1

「今日からここに通うのか？」

統一教会花守学園それが、これからボクの通う学校の名前。そしてボクの名前は裂鋼迅雷。れっぷこうじんらい どうしてこの学院を選んだかというと信美学、特にアルネシア神と墮ち神の関係に興味があるからだ。親に連れられて何度か、聖地・アナスタシアに行つたことがある。うちの親は共に敬虔な信者で、心の底からイヴを崇拜しているからだ。ボクの夢は教会で働くことなんだ。その夢を叶えるためにここに進学したというのは、建て前で一人暮らしがしたかつたというのが大きい。両親を説得するためには調度良かつたというのもあるが、ここは去年まで女子校だつため、女子の比率が高く、しかも美少女が多いと聞いたら、入学するに決まっている。男はロマンを求める生き物だからね。ハーレムという響きに淡い期待を抱いてしまったんだよ。

見渡す限りの女子、白いセーラ服を身に纏つた麗しの乙女達。共学最高！ ここはまさに秘密の花園だ。爬虫類の鱗ようなものに覆われた手足や、岩のようにゴシゴシした身体やら全身に包帯を巻いた女性などを見かける。えっ！ 目を擦り、もう一度見るが、どうやら見間違いじゃないみたいだ。教会が運営する高校だからか？ 教会は統一宗教と呼ばれさまざまな宗教が混在しているため、日本国籍を持たない者を所属している。統一宗教には国境はなく、差別もないため、日本人以外も多く受け入れていると聞いたことがある。入学式は体育館で行なわれる所以、体育館を目指して歩いていると、うる若き乙女の悲鳴が聞こえてきた。声がしたほうを見ると、すでに人だかりができていた。うあ、野次馬がたくさんいるなと思いながら、人波の中に潜り込んでいく。だつて何が起きたのか？ 気になるじゃないか。好奇心を旺盛な年頃なんだよね。

制服ではなく赤と白を基調とした巫女服を着た女性が、ギャルぽい

茶髪の女性を踏みつけた。『きゃあ 巫女姫様カッコイイ』
という黄色い声が複数聞こえてくる。先、耳にしたのもこの歓声な
のかしれない。巫女姫と呼ばれた女性は非常に整った顔立ちをして
いた。純粹に綺麗な人だなと思えた。

「これに懲りたら、もう風紀を乱すことはしないことね。次は退学
処分にしますから 肝に命じ解いてください」

「は、はい」

「では、体育館に参りましょう。もうじき入学式が始まりますから」
その一言で体育館まで道が作られる。その道を優雅に堂々と進んで
いく、後ろ姿は凜々しくて威厳に満ちていた。彼女の姿が消えるま
で見つめてから、ボクは体育館に向けて再び歩き出した。

入学式 その2

体育館に到着したボクは、椅子に座り入学式の開始を待っていると、隣りに座っているフリフリの改造制服を着た朱色の髪をした女子に話しかけられた。

「ねえ、キミつてもしかして。志野神中の裂鋼迅雷じゃない。忍者なんでしょう。私は臨海鈴刃りんかいすいは、キミの大ファンかな？」よろしくと、手を差し出していくので「いらっしゃい、よろしく」と挨拶を交わした。そのあとも、しばらく話していくたら入学式が始まり、巫女姫様の新入生へのメッセージというのは、平たく言えば、入学おめでとうということだろう。何か小難しいことを長々と話しているが、まともに聞いている人はいないだろう。巫女姫様の話が終わり、新入生代表の挨拶が始まった。壇上で話す姿勢は、新入生とは思えないほど凛々しく堂々としている。文句のつけようのないくらい完璧な挨拶をしたのは、花守虹彩はなもりアーリスという少女である。少女挨拶が終わると今度は、これからスケジュールと校則について説明が長々と続き、入学式も終わり校内を歩いていると萌え萌え信仰学部からチラシをもらつた。

新入生を勧誘するものだろう。チラシにはイヴの伝説について書かれており、下にはアルネシア文字で『部員募集中』が書かれていた。それをくしゃくしゃに折り曲げポケットにしまい校内探索を続けていると

「ねえ、迅雷くん。先、萌え萌え信仰学部からチラシもらつてたよね。もし良かつたら、一緒に入部しない。私、イヴの伝説にちょっと興味あるだよね」

「確か……臨海鈴刃さんだけ……」

「鈴刃でいいわ」

「で、鈴刃さんは何で ボクを …… 誘つてくれたの？」

「それはキミ興味があるからだよ。キミの噂はいろいろと聞いてい

るよ。だからね、一度ね、会ってお話ししてみたいなと思っていたんです。それに迅雷くんは忍者なんでしょう。ウフフ これからの学園生活が楽しみだわ

どこかうつとりとした顔で、絹のよつに細い朱色の髪を靡かせ、手櫛を入れて優雅に佇んでいる姿は、素直に美しいと思えた。

「それは光栄です。あなたみたいな美しい女性に興味を持つてもらえるなつて でもボクは、鈴刃さんのことによく知りませんが、確かに萌え萌え信仰部には興味はあります。イヴと墮ち神の関係性を調べるための手段としてこの高校に入学しましたからね」

「なら、話は早いはこれから、見学にいかない」

「今日は止めておきます。もう少し校内を見て周りたいので」

「わかった。引き止めちゃって、ごめんね。じゃあ、またね」

鈴刃さんと別れ、校内探索を続ける。めぼしい所は、あらかた見て回り、日も暮れてきたので今日はもう帰ることにした。

男子寮

男子寮に着いたボクはそのまま自室に向かった。一週間前から入寮しているので、寮での生活もだいぶ慣れてきている。まあ男子寮と言つても一、二だけで三階以上は女子住んでいるので 共寮とも呼ばれている。トイレやシャワー室などはもちろん別ですし、盗聴、盗撮といった覗き行為の心配もありません。なぜかというとここが普通の寮ではないからです。寮母さんの異能力『聖なる領域・セイクリッドフィールド』の中では性欲は吸収され、どんなエロ餓鬼でも変態でも聖人ようになってしまうのです。

また煩惱のある人は二階から三階に行くこともできません、聖なる壁・セイクリッドバリアがあるので、女性は安心して生活することができます。交流を深めるために談話室もありますが、利用する人は少ないです。

とりあえず自室に戻ったボクは、荷物を床に置き、部屋着に着替え、ベッドに倒れ込みながらこれからのことについて考え始めた。明日は学科別に学力テストに身体測定、健康診断、体力測定、信仰力測定というものまであるらしい。それらのデーターを統計してクラス分けするらしい。S～Eクラスまであり、Sクラスになれば特権が与え、有意義な学園生活が送れるらしい。どんな特権がもらえるのは教えてくれなかつたが、根拠のない憶測の域をできない意見が意見が飛び交っていたのを覚えていて。あとは部活か、一様見学に行つてみようかな？ ちょっと興味あるしね。そろそろ食堂に行つてご飯でも食べるかな。お腹すいてきたしね。

食堂で夕食を済ませたボクは自室に戻つてきたい。寮内に知り合いがないボクは自室以外で過ごすことはない。人見知りが激しいため、友達を作ることもできないでいる。この寮に入つて一週間経つが、これといった問題は特になく、快適な寮生活を送っている。隣にどんな人が住んでいるのかわからないのは少し不安が、気にす

るほどのことではない。何度か、挨拶に行つたのだが？ いまだに会えていないというか、この寮にどんな人が住んでいるのか、全然わからない。親睦会という交流するイベントみたいなものがまったくなし、積極的に話しかけるタイプではないので、こうして自室で読書をしているわけだ。今日はこれくらいにしておひ寝るか、明日の実力試験に響くかもしれないからな。

クラス分け試験

翌朝、ベッドから起きたボクは、顔を洗つて歯を磨き、制服に着替え食堂で朝食を摂り学校に向かった。三分ぐらい歩いて校門を抜けた辺りで

「おはよう、迅雷くん。今日はお互い頑張ろうね。試験教室まで一緒に行きましょっ」

「鈴刃さん、おはようございます。ええ、構いませんけど」

「じゃあ、決まりね。ところでランクとか狙つてたりする。わたしは全然興味なんだけどね。男の子ってこういうのに興味あるのからな」

「確かに昨日は、その話題で盛り上がつてましたね。Sクラスにはれば『えられる』という特権には心ひかれますね」

「やっぱりそんなん、キミもそういうの興味あるだ。ホント私そういうの全然興味ないかな」

その後もたわいもない世間話をしながら試験教室まで歩いていた。ボク達が着いた頃には教室は信仰科の生徒で溢れていた。チラホラ男子の姿も見えるが、断然女性のほうが多いと思う。もともと信仰科は女性の比率が高く、技術科は男性の比率が高いという一般的な見かたです。ボクが信仰科を選んだのは、もちろん女性が多いというのもあるですが……小さい頃から信仰学を習っていたので、それを活かしたいなと思ったからですね。

席につき準備を始める。まで、残り五分を切つた頃から辺りは静かになり、みんな席につき、テキストをチェックしている人や自作ノートを見ている人など、思い思いの方法で最終確認をしていった。

テスト開始時刻になり、担当講師が入つて来た。プリントが配られ簡単な説明を受け、筆記用具を手にとつて書きはじめる。問題はそれほど難しくなかつたので、スラスラと書くことができた。全部埋め終わり、再度ミスがないかを確認してから用紙を裏がして退室

した。次は身体測定なので、保健室へと移動を開始した。

保健室到着した、ボクは素早く身体測定と健康診断を済ませ。体育館に向かって歩き出していた。体育館では体力測定が行われることになっている。体力測定においても腹筋や背筋などいたつて普通のことしかやらないし、ボクは信仰科なので、信仰力が高ければSKラスになれると思う。でも体力測定で好成績を取った方が評価はいいと思うから全力で頑張るけれどね。体力測定を済ませ、今度は信仰力測定のため、イヴの部屋を目指して歩み出した。イヴの部屋には神顯現させるための準備が施されていた。ボクは先祖代々受け継がれてきた十字架をポケットから出し、両手で強く握りしめ、祈り始める。神を顯現させるにもは、長い時間大切にされ、強い想いが詰まつたモノが必要になる。

また、数百年ほどの大切に使われ、強い想いが込められているモノは高位の神を宿すと言われている。ゆえに九十九神に近いと呼ばれている。

そのため家宝と呼ばれるモノを用いて神を顯現させる人が多い。限られた人間しか高位の神を顯現させることはできない。信仰力測定とは、どれだけイヴを崇拜しているかを測るのではなく、格式や伝統と言つた。家柄を見るものなのだ。

銀の十字架を両手で強く握りしめて、一心不乱に祈り続ける。神を顯現させるには凄い集中力が必要になる。

(もつと強く、もつと真剣に、そして明確に、ハッキリと神の姿をイメージする必要がある。もつともつともつと強くそして明確に、確實に、正確にイメージしなければいけない。失敗は許されないのであるから。精神を研ぎ澄まして、もつと深く深く、集中するだ、集中するんだ)

ソフリオン・アルティオ・トランシュヴェール

床につくほどなの長さで、手入れの行き届いたサラサラツヤツヤ翡翠ひすいの髪の毛に、透き通るよう綺麗な雪色の肌と孔雀石の瞳は相性がよく桃色の唇が似合うと想うだよね。背は高く胸は程良い型の美乳で、すらりとした細い脚にスレンダーな体型を思い浮かべていく。イメージを少しづつ具現化させていく。ゆっくり確実に、慎重に慎重に神を顕現させていく。人の形を模した神。それが我々の神であり、イヴの力だと言われている。

銀の十字架が白く光り出し、ヒトの形へと変わっていく。神が顕現されようとしている。眩い光が辺りを包み込む。そして神がその姿を顯にする。それはまさに思い描いた、イメージ通りの神々しく美しい神で。思わず息をするのも忘れて見惚れてしまうぐらい可憐で絶世の肉体美がそこにあつた。

「私はソフリオン・アルティオ・トランシュヴェール、ミコステリオン秘蹟を授け
るのにあたいする人間か、見極めてやる。さあ、我的そなたの信仰心を、忠誠心を見せてみろ。」

赤を基調としたイブニング・ドレスは、ワンピース型の衣服で、スカート丈はくるぶしまであり、腕と胸元や背中が大きく露出するようにな作りになっている。また、左手には鞭を持つており女王様といつた出で立ちだ。

「お前との契約の仕方は、その銀の十字架と一緒に受け継がれてきたからなしている」

左胸にあるという心臓目掛けて、鋭く爪で勢いよく突き刺し、心臓をえぐりとる。血がされることも罪悪感を覚えることもない。なぜならば彼女は人間ではないからだ。えぐり採った心臓をためらうことなく口の中に放り込み、咀嚼運動しゴクリと飲み込む。心臓といて片手にすっぽり収まる程度の赤い球体でなんだけどね。

これを食べることで契約結ばれ、不老不死の体を手に入れることができるものらしい。パランドラの死によって不老不死はなくなつたかのように思えたが、完全に無くなつたわけじゃない。銀の十字架に宿している神・ソフリオン・アルティオ・トランシュヴェールは不老不死を与える力が、なぜならば、不老不死でなければ彼女の側にいられないからだ。銀の十字架に宿している神は、ドゥなのである。一日に最低十回ぐらには死ぬと思うから、覚悟してねと言われたのを覚えている。

「不老不死になつたことだし、そろそろ始めますか？　まずはこれを着けろ奴隸^{イヌ}」

革でできた犬の首輪を投げてきた。ボクを自分の支配下におくことが彼女の狙いなのだ。

だがここで彼女に忠誠を誓つてしまえば、ボクの人生は終わつてしまつ。一生彼女の奴隸^{イヌ}として暮らさなければいけなくなる。そうなれば、もちろんハーレムを作れることもできなるわけだ。しかしここで信仰心を示さなければSクラスに入ることは、まずできないだろう。親の期待を裏切るわけにもいかなし、何よりもボクは完璧を求める男だ。常に一番でなければいけない。完璧であり続けることがボクの使命だと感じている。イヤーしかしだ。だからといって服従というは、いささか抵抗を感じる。自問自答を繰り返している鞭がとんとんくる。背中、腕、足、腰など全身からヒリヒリと痛みがはしる、鞭の動きは変則的すぎて、動きが読めないため、上手くかわすことができずにダメージを受け続ける。殺傷能力の低い武器だが、それでも攻撃されるとシャレにならないくらい痛いし、何より喜ばせていることが癪だ。

神を見せ合い交流会 その1

「ややうとそれをつけて我に忠誠を誓いなさい。それしか道はないですから」

「嫌だな。誰がこんなものをつければ！ バカ、アホ。お前の支配は受けない」

「ふつ。わかりました。では致し方ありませんね。全力を持つて跪かせて見せますわ」

罵られたまま終わるのは癪だったので、一矢報いたという気持ちで言い返したのだが、それがいけなかつた。女王様の逆鱗にふれ、鞭さばきの腕は格段に上がり、あっさり足をとられ、地面に跪いてしまつた。そして拘束され犬の首輪をはめられたうえに雄犬呼ばわりされた。けれど彼女に忠誠を誓つたわけじゃない。まだボクは諦めていない。

「まあ、今日のといひはいれぐらいで許してあげる。また後で会いましょう。ウフフ」

そう言い残して十字架へと戻り、銀の十字架は首輪にくついたまま取れなくなつた。もはやこれは呪いだと思い諦め、イヴの部屋を出て体育館へ向かうことにした。

体育館で神交流会が行われるからだ。お互に顕現した神を見せ合いい交流を深めるという行事である。

体育館に到着したボクは辺りを見渡すといろいろな神がいた。人型の神からウサギやら、ネコやら身近な動物から、ドラゴンやフェニックスなどの幻想獣まで 本当に何でもありという感じだった。「有象無象の神がいりおるな。我には遠く及ばない雑魚ばかりじゃのう。この学年を我が支配下におくとも簡単じやな」

十字架からヒトへと姿を変えた、ソフリオンが嘲笑うように言つ。どうしてこの神はこんなにも傲慢なのだろうか？ ボクはどちらかとこうと清楚でお淑やかな女性が好きなのに、ドジだなって 溜め

息しかでこないよ。せめて問題を起こさないことを祈ろう。

でもホントに数多の神がいるな。中でも一番の注目を集めているのは、茜色の髪を光られた、新入生代表も務めた。花守虹彩^{アイリス}が顕現させた、フェニックスだろう。ボクが顕現させた神よりも目立つている。まあ所詮人型だからな

あまり珍しくないのだろう。

フェニックス言えば伝説上生物で数々の神話や逸話などに登場している、とても有名な生物だ。それにくらべてボクの神は、嬢王様気取りのドSで、変態なのだ。比べるまでもないということだ。

「そここの娘。たかだかフェニックスごときを顕現できたからと言つて、あまり調子に乗るなよ。私はそんな火の鳥よりも強く、偉いんだからな。身の程をわきまえて、我に跪け」

ドスの聞いた声で叫ぶ、ソフリオンに注目が集まる。よほど自分よりも目立つてはいるのが気に入らないのだろう。訳のわからない因縁をつけてやがる。まったく面倒な神を顕現させてしまつたと後悔する。目障りなぐらいの視線を感じるがない。恐怖しているのか？ それとも呆れているのか？ 判断がつかないが、このまま何事も無く終わるとは思えなかつた。一波乱ありそうだ。ボクの学園生活は前途多難だな。

神を見せ合い交流会 その2 幻影の蛇

「あら、随分と威勢の良い神も居たものね。花守の巫女であるわたくしに牙を剥くなんて、正直驚いたわ。朔弥、お相手してさしあげなさい」

「承知いたしました、虹彩様。^{アイリス} それでは害虫駆除を開始します」

俺達の前に姿を現したの漆黒飛竜、北欧神話に登場するにニーズヘッグだった。コイツ寄生型か？ 生まれながらにして神を宿すという、神の申し子。正真正銘の純粹培養された巫女ということか？ 完全に神と同化してやがるぜ。

「我も随分と舐められたものだな。羽の生えた気持ち悪いトカゲなど瞬殺してやる」

アレをトカゲというのはちょっと無理があるだろう。全身トゲトゲしい感じがあるし、トカゲにしては「テカすぎ」だろう。

最初に仕掛けたのわ、朔弥と呼ばれた少女の方だった。てっきりソフリオンが先に仕掛けるものだと思っていたからこれは驚いた。鋭い爪がソフリオンの肌を切り裂く、無数の蛇が湧き出してくる。気持ち悪い、傷口から鮮血の蛇が姿を現す、ソフリオンには血は流れてないはずなのに、あの蛇は紅い、血のようになっていたのではないか？ それに、いつ、どうやってソフリオンの体内に入り込んだんだ。「他愛も無い、まんまと術中にはまるとは 身の程知らず」

「…………き……きさま……なに……を……した……」

「驚いた、まだ口を動かす力はあるようだな。『ゴキブリなみの生命力を持つ』ているな」

完全のボク達の負けだ、これが花守の巫女に力か？ 压倒的過ぎる、虹彩^{アイリス}というは神の領域に達しているのだろう。だからフヨニックスを顕現することができた。まさしく一年最強は彼女だろう。

「大人しく負けを認めなさい。今の貴方では幻影の蛇には勝てないわよ」

突如として姿を現す鈴刃さん、幻影の蛇とはビックリだ。

「いつの間に、わたしの空間に割り込んできたんだ。貴様、ただまのではないな」

「オホホホ 勝負はもうつきました。これ以上弱いモノ虐めをするなら、あたしが相になりますよ」

「邪魔が入ったか？ 運の良い奴だ。今はもめごとを起こすわけにはいかのでな、アリーヴェデルチ」

「鈴刃さん助かりました、ありがとうございます」

深いダメージを受けたため、ソフリオンは十字架に戻っていた。壊されないでホント良かった。しかしソフリオンが手も足もでなかつたとは今だに信じられない。

「お礼には及びませんよ。あたしもこれで失礼しますわ。オホホホ

「
鈴刃って一体何者なのだろうか？ ニーズヘッグの少女のことも知っているようだつたし、今度会つた時にちゃんと聞いてみよう。いろいろなことを知つていいかもしねない。

今日はもう寮に帰るか？ 交流会どころじゃないしな、精神的にかなり疲れたからな休みたい。それにもうここにはボクの居場所はないからな。

花守虹彩を敵に回してしまった以上は、平穏な学園生活を送ることはできんだろう。

まずは幻影の蛇を倒す作戦を練らなきゃならない。負けたまま引きさがるわけにはいかない男として ハーレームを田指すためにも勝つ。勝つてカッコいいところを見せにと 男が廢るというものだ。このままでは終われない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0022z/>

花守の娘とロマンを求める男

2011年12月5日20時45分発行